

保育者は保育実践において何を大切にしているか

What does nursery school and kindergarten teacher make important in practice?

佐藤 智恵

要 旨

本研究の目的は、ある3名の保育者が実践の中で大切にしていることをそれぞれの語りから明らかにし、保育とはどのような営みであるかということを描き出すことである。方法は、個別にインタビューを行い、語りを質的に分析した。分析の視点は、(1)対象者それぞれが経験した個別具体的な保育実践とそれぞれの意識について焦点を当てる、(2)保育者の保育実践に対する意識には、勤務園の保育理念が影響していると考え、勤務園の保育理念についても目を向けるという2点とした。分析の結果、保育がどのような営みであるかという点において、(1)「実際の保育」と「実践を語る言葉」の間に齟齬がある可能性が潜んでいる。(2)保育実践は他園や同僚といった「他者」と自らの保育実践を比較することによって、自らの保育観が浮き彫りになることがある。(3)保育に関して自身にとってあまりにも当然のこととして捉えられている事象の場合、改めて言語化することが困難という3点が浮かび上がった。

I. 問題と目的

現在、幼児教育や保育において「保育の質」の向上が求められている。それは、平成20年に改訂された保育所保育指針において、質の高い保育を展開するために保育者の専門性の向上について明記されたことから明らかである。

「保育の質」を語る際、2つの側面からの言及がなされている(秋田ら,2007)。1点目は保育をサービスと捉え、保育室の広さや子どもと保育者の人数割合の問題など、物的なものの量の確保に関する側面から保育の質を考えるもの(大宮,2006;庄司ら,2010)、2点目は保育者の専門性という観点から保育実践の内容についてその質を問うものである(塩路ら,2004;根ヶ山ら,2006;諏訪,2000)。秋田ら(2007)は、現在の日本では保育の質を考える際、前者に重きを置く傾向が強いことを述べている。それは、高辻(2003)が、日本での保育研究における「保育の質」の定義に未だ確固たるものが見られないことを指摘していることからわかるように、保育実践の内容という質的な側面からの「保育の質」が何を指すのかが明確にされていないことが1つの要因として考えられる。その理由として、保育実践は個別具体的で多様な営みであるために、質的な側面からの「保育の質」について列挙することが困難であるからということが考えられる。

現代の日本の幼稚園・保育所における保育は、様々な社会的なニーズの高まりや、子育て環境の変化から、乳幼児の個々の発達課題を考慮した保育の実施や育児不安を抱える保護者への対応など、保育者の高い専門性が必要とされている。そのような中、重要な課題であるにも関わらず言及されることが少なかった質的な側面からの「保育の質」を再考する必要があるだろう。

「保育の質」を考える際、保育者の存在は切り離せない問題である。保育所・幼稚園で生活する乳幼児にとって、日中活動のほとんどの時間を共に過ごす保育者は、家族以外で最も身近な大人の一人であり、乳幼児のさまざまな成長に大きな影響を与えられと考えられる。その中でも、保育者の保育に対する考え方

や子どもをどのように捉えているか、また何を重視しているかということは、保育者の保育行動の根幹となる部分であろう。保育者がどのように子どもや保育を捉えているかという点については、「保育観」という観点からこれまで数多くの研究がおこなわれてきた（赤塚,1981；森ら,1986；森ら,1986；藤崎ら,1985；藤崎ら,1986；邨橋ら,1989；中,1996）。そこでは、ある時代の保育者が持つ保育観や子ども観が量的な研究方法により明らかにされ、一般的な保育者の保育観が示されてきた。しかし、個別具体的である保育実践や保育者の保育観を語る際には、一般化されたものからは明らかにされないものがあり、質的な研究方法でしか接近することができない事象もあると思われる。そこで、インタビュー（奥山,2008）や面接法（梶田ら,1990）、観察による事例の検討（井戸,2007）など質的な研究手法を用い、保育者の保育観を明らかにしようという研究が行われている。少数の事例ではあるが、このような個々の保育者の持つ保育観を描き出すことは保育を考える際に意義あることだと思われる。

一方、保育者に関する研究には、保育者の成長という側面からも研究が行われている。このことについては、保育者の力量形成や熟達化という言葉で研究が行われている。保育経験年数によって指導方法が異なる（杉村ら,1991）ことや、保育経験を積み熟達するにつれて豊富な構造化された知識によって問題解決を行っていることが報告されている（高濱,1997；高濱,2000）。このことから、経験年数を経ることでの保育者としての成長があると考えられ、保育者は様々な経験を蓄積させることで「よい保育者」となっていくと言える。

しかし、経験を積むことで保育者としての技量を上げていくというような、いわば右肩上がりの成長という側面からのみ保育者の在り方を語ることはできない（三谷,2007）。なぜならば、保育という営みには、当の保育者には意識化されない自明化された「当たり前」となった保育ならではの事象があり、保育者はこのような保育の世界ならではのものの考え方や捉え方を身につけることで「保育者」になっていくと考えられ、その過程において成長という言葉だけでは説明不能なものがあると思われるからである。

保育者を取り巻く保育という社会には、浜口（2008）が、保育者が「育ち」という言葉に特殊なニュアンスを持たせて使用するということを述べたことから分かるように、保育者ならではのものの捉え方や考え方というものが存在することが考えられる。例えば「子どもの思い」という言葉を聞いた時、保育に携わった経験のあるものならば少なからず「あのこと」と思い当たる事柄のことである。このことは成長という側面だけでは語りできないものだと考えられる。しかし、鯨岡ら（2007）が言うように子どもと心を通わせた保育実践上の「あのこと」は、可視的でないために当事者以外には理解しづらく、保育者自身ですら掴みづらい側面があると思われる。

保育実践は、保育者と子どもとの個別具体的な営みである。そこには保育者の保育観はもとより、職員関係、保育者と保護者の関係など、さまざまな異なった状況があるために、非常に複雑な行為であると言え、その理解は時として困難な場合がある。その点に触れるため本研究においては、質的な研究方法をとる。それは、津守（1997）や鯨岡（1999）が、幼児と保育者との関係の中での保育者の姿を丁寧に描きだしてきたように、個別具体的である保育を描き出す際に、一つひとつの事象を丁寧に洗い出すことでしか表わせないものがあり、保育実践の中にある事象を蓄積していくという質的な方法が適していると考えられるからである。

そこで本研究では、ある3名の保育者が実践の中で大切にしていることをそれぞれの語りから明らかにすることで、保育とはどのような営みであるかということを描き出すことを目的とする。

Ⅱ. 方法

(1) 方法

対象者自らの保育実践エピソードの語りを質的に分析し、保育実践の中で大切にしていることに関する考え方を明らかにする。方法としては、対象者に保育実践に対して自由に語ってもらい、発表者との相互行為の中で語りを産出するものとした。

(2) 対象者の選定方法

保育経験が蓄積されることで実践において重視する視点が養われると考え、10年以上の経験がある保育者とした。依頼は筆者の知人や保育所・幼稚園の園長先生を通し、名前や勤務先などのプライバシーが守られることを説明し、了解が得られた人を紹介してもらった。

(3) 対象者

対象者は以下の3名である。

- 1) A保育者・・・X市にある私立保育園で勤務している。A保育者は四年制大学で幼稚園教諭免許状と小学校教諭免許状を取得し、卒業後、X市にある私立C幼稚園で4年間、正規職員として勤務している。C幼稚園に就職したのは、「その保育がどうというよりは、ただただ幼稚園に勤めたいなあという思いだけ」であったことが話された。4年後、「園が嫌とかそういうことではなく、幼稚園教諭をやりきったな」という意識の中でC幼稚園を退職した後、現在の勤務園である私立D保育園でパート職員として働き始めている。「はじめは気軽なお手伝いという意識だった」D保育園での勤務であったが、A保育者は徐々にD保育園で働くことの面白さを感じはじめ、働きながら国家試験にて保育士資格を取得した。パート職員として3年間勤務後、D保育園と同法人のE保育園に正規職員として採用された。E保育園で正規職員として4年間勤務後、異動になり再びD保育園に勤め、現在6年目である。幼稚園保育園の通算勤務年数は、16年間である。私生活の面では、E保育園に勤務をしている期間に結婚をしている。インタビュー時は2度目の育休を終えて復帰し、数ヶ月経た頃であった。
- 2) B保育者・・・Y市にある公立保育所にて勤務している。B保育者は、短期大学で保育士資格を取得し、2年間公立臨時保育士として勤務をした。その後、現在勤務するY市の保育士として採用された。保育士経験は20年間である。Y市の公立園は、B保育者より「ずっと年上の人ばかり」という比較的年齢が高めの保育者で構成されており、B保育者は「久々の採用で、期待の新人」であった。年齢の近い保育者はすべて臨時採用の保育者であったり、時には自分よりも年上のパート保育士とクラス担任を持つこともあり、自らがクラス責任者となることもあったことから、「自分がしっかりしなくては」、「人には頼れない」という気持ちを自然と持つようになったということである。またそれには、「いいと思うことはきちんとやりたいし、そこを『まあいいか』・・・とはできない私の性格」も少なからず影響しているという語りがあった。プライベートでは、30代半ばで結婚、出産を経験し、現在は2児の子どもと夫の4人家族である。
- 3) C保育者・・・Z市にある私立幼稚園に勤務している。短期大学で保育士資格と幼稚園教諭免許状を取得し卒業後、Z市にある私立F幼稚園で3年間勤務した。F幼稚園への就職は、幼稚園実習で訪れたF幼稚園の雰囲気に関心を持ったことをきっかけとし、実習後も行事などに参加したり、アルバイトとして園に出入りをしてきたことから「園長先生からも『当然来るよね』と言ってもらい、自分もそれが自然だった」ということである。幼稚園での勤務は非常にやりがいがあったが、「園

内になんとなくそういう雰囲気があったし、自分もそうするもんだと思っていた」ことから、妊娠を機に退職をしている。子育てを経て10年ぶりにF 幼稚園にパート職員として復帰し、通算勤務年数は12年間である。退職してからもずっと、園行事には子どもを連れて参加したり、時にはバザーなどの手伝いをしたこともある。再就職においても、園長先生から「そろそろ〇〇ちゃん（子どもの名前）も大きくなったし、少し力を貸して欲しい」との依頼があったことがきっかけであった。

(4) 日時・場所

それぞれの対象者の希望により、日程を設定した。A保育者は、201X年6月20日、B保育者は201X年5月3日、C保育者は201X年4月28日である。インタビューにかかった時間は、それぞれ90～120分程度であった。対象者には、インタビュー終了時に、分析にあたって不明な点があった際は、電話で確認を取らせてほしいことを依頼し承諾を得た。また、語りを書き起こし逐語録を作成したものを対象者に確認してもらうように依頼を行った。B保育者とC保育者からは承諾が得られたため、インタビュー後1週間程度で逐語録を対象者の自宅に郵送し、内容に誤りがないか、また細かなニュアンスの取り間違いがないかを確認してもらった。A保育者については、「話したことを自分で改めて読むのは恥ずかしいから、あとは（筆者に）お任せしたい」との理由で、逐語録の確認は実施できなかった。インタビューの場所は、それぞれの希望によって現在の勤務園や対象者の自宅にて実施した。

(5) 分析方法

インタビューを開始する際に対象者に許可を得て、語りをICレコーダに採録した。また、途中で採録されたくない内容がある場合は、申し出るいつでも録音の中断が可能であることを説明した。インタビュー後、対象者と発表者の語りを全て書き起こし逐語録を作成した。分析の視点の1点目としては、対象者それぞれが経験した個別具体的な保育実践とそれぞれの意識について焦点を当てる。2点目としては、保育者の保育実践に対する意識には、勤務園の保育理念が影響していると考え、勤務園の保育理念についても目を向けるものとする。

Ⅲ. 結果と考察

語りの分析により「個々を大切にする保育と集団活動の経験」、「上司・同僚や保護者との関係と保育実践との関連」、「保育実践における『見た目』」という3つの項目が浮かび上がった。本研究においては、紙面の関係上、「保育実践における『見た目』」、「個々を大切にする保育と集団活動の経験」について報告を行う。

(1) 保育実践における「見た目」

全ての対象者から「見た目」というような表現を使用して、保護者の目や園長や周囲の保育者の視線や評価に関する事柄が語られた。括弧内は筆者の語りである。

A保育者の語りからは、複数の園での勤務経験によって、現在のA保育者の保育観が徐々に構築されてきたことがうかがえる。

私、今の保育園の前に幼稚園に勤務してたんですけど、なんかその園って見た目を重視してたんですよ。（見た目と言いますと？）あの～。作品の綺麗さとか行事の豪華さとか、子どもの態度がきちんとしてるとか、そういう点で保護者の目とかを。（あ～そういう。A先生のお話では、今の勤務園とは保育の

考え方に違いがある感じですけど、当時は・・・そのそういう見た目重視についてどう思っていましたか？）う～ん。あの当時はね、それについて、特に何も感じてなかったんですよね。今思うと、「あの保育の意味はなんだったんだろう」って疑問があるし、「よく4年間も勤めたな」って思いますけど（笑い声）。新卒でお世話になった園で、それしか知らないから、そこについて行くのに必死っていう。（あの保育の意味はなんだったんだろうっていうことをもう少し聞かせてもらえますか？すごく面白い）えっと・・・う～ん。今、保育をしてて。う～んD保育園って自然だなあと。子どもも自然、保育者も自然っていう。（自然という・・・）こう・・・保育を「よく見せよう」とかでなく、子どものそのままを大事にしようっていう雰囲気があると思うんです。園全体の空気として。偶然ここでお世話になるようになったんですけど、自分にはこういうやり方があってるなあと今はつくづく思います。（A保育者の語り）

B保育者からは職員間の仕事に取り組む姿勢の違いと、それを表現するものとして、「表面的な見目が綺麗な理由」という言葉で語られた。

公立だからある程度・・・その・・・保育の質が保たれているって言いたいところですけど、意識のある人とそうでない保育士がいることもやっぱり事実なんです。（えっと・・・意識が低いっていう？）そうそう、「なにもしない」っていうタイプの保育者も少数やけどいるんです。「えっ？」って思うのは、やらない言い訳を上手くそれらしい理由を言っているんです。「子どもの主体性を大事にしたいから」とか。いやいや、もっと子どもと過ごそうよ、遊ぼうよって思うわけです、私は。（ハハハ。なるほど。所長先生や周囲の先生はなんと？）保育って経験年数とかでなくて「分かる人」と「分からない人」がいることない？（分かる人っていうと？）なんか・・・センスっていうか・・・嗅ぎ分ける力っていうか、そういう分かり方ってあるかなあって。（ああ、なんか分かります。そういうのあるかも）でしょ。で、経験のある保育者でも、そういう表面的な見目が綺麗な理由を見抜けない人もいますよ。（B保育者の語り）

C保育者からは、勤務園の多忙な行事について、保護者に「見せる機会」であるとし、その在り方について肯定的に捉えていることが語られた。

園では行事などが結構あって、やらないといけないことが満載なので、それはやっぱり忙しいんですね。（えっと、保育者が？子どもが？）両方です。私たちも忙しいし、子どももあれこれあるんですね。（ああ。それについてはどうです？大変かなあとか）う～ん。そうですね・・・大変と言ってしまうばそうかもしれないけど、それって大事なことだと思うから。（大事なことというのは、えっと・・・行事のどういう部分が？）やっぱり形としてきっちり「できる」っていう経験をさせることは子どもの自信にもつながりますし、お母さんたちのこう「目標」っていうか、親に「このくらいはできるんだ」って見せる機会は大事。（ああ。なるほど。）というのと・・・（ん？）まあ、ある意味、「私の保育の評価」にもなりますから、（あ～、園長先生とかからの？）ええ。あと保護者からの。（ああ。そうか）「一人ひとりの子を丁寧に丁寧に保育してる」っていうのを見てもらう機会ですから。（ああそうですね。う～ん・・・その・・・「一人ひとりを大事に」っていう部分と、「見せる」っていうこととか「行事前の忙しさ」がどう結びついているか、もう少しお話してもらえますか？）結びつきですか？一人ひとりを丁寧に保育していることが、行事で見てもらえるってことです。（・・・ああなるほど。）（C保育者の語り）

A保育者からは、以前の勤務園の実践が「見た目」を重視していたという気づきが、退職後、現在の勤

務園の保育実践を経験することで初めて実感されたことが語られた。また、B保育者は他者が行う「実際の実践」とそれを「上手く説明する言葉」の間に存在する矛盾を「見た目の綺麗な理由」という言葉で表現した。

C保育者と発表者との間の語りでは、発表者は、C保育者の「行事などやらねばならない事項が多い」という語りと「一人ひとりを大事にする保育」という語りにある種の矛盾を感じ、それがどう結びついていのかを深く尋ねようとしている。しかし、C保育者からはこの質問について詳細に説明されることはなく、発表者もそれ以上そのことに踏み込むことはなかった。これは、発表者が自身の保育観とは異なると思われるC保育者の保育観と向き合った際に、疑問を投げかけることへの躊躇があったと思われる。

(2) 個々を大切にすることと集団活動の経験

保育者として働く上で、個々の子どもを大切にすることと、集団活動の展開、いわゆるクラス運営についての経験がそれぞれの対象者から語られた。A保育者からは、自らの保育行為の結果はすぐに出ないものであるために、評価は出来ないとした上で、個々の生活の充実が集団生活の充実に繋がっていくと語られた。

保育って・・・こう・・・なんていうか評価ができないでしょ。(う～んと・・・子どもの？自分の？) あ、両方です、両方。子どもの姿って今すぐどうこうなるわけじゃないし、そんなにすぐ「これがよかった」とか「ダメだった」とかは言えないし、そこが・・・面白いところでもあり難しいところだと思っています。私のやっていることが、それこそ10年後、20年後に形になっていくという思いは、割と初任の時からあって。あ～、若い時はそういうことを思う余裕はなかったかな。必死やったから(笑い声)。それで、結局は自分の技っていうか子どもを理解する力が問われているなど。個と集団ってよく対比されるけど、私は切り離しては考えられないと思う。(それは、どういう？もう少し聞かせてもらえますか)。1人1人が充実してたら、集団も充実してくるような気がしています。それが保育の良さ、集団の良さだと。(A保育者の語り)

B保育者からは、個を大切にすることに重点を置いていることが語られた。その中で、集団活動について語る際に、他者からの評価が併せて話された。現在は、そういう点を気にしなくなったということであるが、自身も経験の浅い時期には、他者からの評価が気になっていたことが語られた。

一人ひとりの子どもを大切に、丁寧に付き合うってことはやっぱり保育の醍醐味やと思う。他にこんなことが出来る職業ってあるのかなあって。私はね、ある程度集団はいいかなあと思って(いいというのは?) 気にしないっていう意味。(それはなぜですか?) う～ん。クラス運営ってことでしょ、集団って。それって結局「私の能力」のことでしょ。みんな、保護者とか同僚とか他人からの評価を気にするから、集団の進め方を気にする必要が出てくるんじゃないかな。私は、今はクラスの子ども全員を大事にできたらそれでいいかなって思っています。昔はやっぱり他人の目が気になったけど。「できる人って思われたい!」というような(笑い声)(B保育者の語り)

同様にC保育者からも経験の浅い時代の周囲からの評価や「無言の圧力」について語られている。

私は今、パート職員なんです。それで、正規職員として働いていた時の違いとして、集団をまとめる

とかクラス運営とかをあんまり考えなくていいということなんですね。(ほう〜) やっぱりそれは主任の人、正規職員の役割っていうか、自分もやってきたからしんどさが分かるから、少し集団から外れる子のことなんかは「いいよいいよ、私に任せて。私が見てるから大丈夫よ」っていうサインを若い先生たちに送ってます。やっぱりね、園の中には「クラスがきちんとまとめられるか」っていう無言の圧力というか、園の先生たちみんなが「出来てる？」って見てる感じはあるでしょ。あれはキツイですよ。(C保育者の語り)

このように集団活動のことを語る際、保育者たちは周囲からの評価や、保育職の厳しさについて言及している。ある程度経験を重ねると、その重圧からは解放されているようであるが、保育経験の浅い新任保育者の期間は、周囲からの期待や見えない圧力を困難さとして捉えていたようである。集団をまとめる力と評価が密接に結びついているという点は、保育という社会に潜んでいる風土の1つの側面であると考えられる。保育者たちは、自身を評価される厳しい視線に耐えながら、自分なりの方法を探り、保育者としての自己の保育観を確立してきたのかもしれない。

本研究の対象者の語りの分析から、保育がどのような営みであるかという点において、以下の3点が描き出された。1点目としては、B保育者の語りに見られたように、「実際の保育」と「実践を語る言葉」の間に齟齬がある可能性が潜んでいるという点である。B保育者に語られたような先輩保育者の姿は、ごく少数の保育者の姿であると思われる。しかし、ここまで極端な事例でないにしても、言語表出がまだ十分でない乳幼児を対象とした職務であること、またその時々で場面や状況が移り変わっていく行為であるため、保育実践には保育者が自己の保育行為を正当化することが容易に行いやすいという側面を内包しているのかもしれない。2点目は、A保育者やB保育者の語りに見られたように、保育実践は他園や同僚といった「他者」と自らの保育実践を比較することによって、自らの保育観が浮き彫りになることがあると思われる。3点目として、保育に関して自身にとってあまりにも当然のこととして捉えられている事象の場合、改めて言語化することが困難ということが考えられる。

保育者にとって、保育は日常行為の蓄積であり、明確な正解がない保育実践においては、その日の自身の実践をふり返ったり評価したりすることは、それぞれの保育者に委ねられる部分が多い。他者と保育を語り合う時間をもつことで、自身の保育に対する考えを意識したり、言語化することが可能となり、よりよい保育の実施に繋がるのではないかと考える。

引用文献

- 赤塚徳郎・森林・大元千種・福井敏雄（1981）保育者の行動特性と幼児の集団行動との関連。広島大学教育学部紀要。第1部 30,143-152
- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子（2007）保育の質研究の展望と課題。東京大学大学院教育学研究科紀要。47,289-305
- 浜口順子（2008）「育ち」観からの保育者論。風間書房。
- 藤崎真知代・熊谷真弓・藤永保（1985）保育者の保育経験と保育観に関する研究Ⅰ。発達研究。1,23-39
- 藤崎真知代・熊谷真弓・藤永保（1986）保育者の保育経験と保育観に関する研究Ⅱ。発達研究。2,17-58
- 井戸和秀・門松良子（2007）保育実践を支える保育の考え方ー幼児の遊びにおける学びとはー。岡山大学教育学部研究集録。136,93-102
- 梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗理・吉田直子・桐山雅子（1990）保育観形成過程に関する事例研究。名古屋大学教育学部紀要。37,141-162

- 保育所保育指針 平成20年告示 厚生労働省告示第141号
- 鯨岡峻・鯨岡和子 (2007) 保育のためのエピソード記述入門. ミネルヴァ書房. 7-9
- 鯨岡峻 (1999) 関係発達論の展開. ミネルヴァ書房. 324-327
- 三谷大紀 (2007) 保育者の専門性とは. 佐伯胖編 共感 育ち合う保育の中で ミネルヴァ書房. 109-113
- 森林・植田ひとみ・大元千種・西田忠男 (1986) 保育者の指導意識の比較－経験・意欲・指導タイプ別考察－. 幼年教育年報. 11,13-23
- 森林・植田ひとみ・大元千種・西田忠男・湯川秀樹 (1986) 保育者の指導意識の比較－経験・意欲・指導タイプ別考察－. 幼年教育研究年報. 11,13-23
- 邨橋雅広・鍛冶則世・浅川潔司・横川和章 (1989) 幼稚園教諭の保育観に関する研究 (1). 日本保育学会大会発表論文抄録. (42). 722-723
- 中 俊博 (1996) 保育者の保育観－幼稚園と保育所の比較からみた－. 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要. 6,129-141
- 根ヶ山光一・星三和子・土谷みち子・松永静子・汐見稔幸 (2005) 保育園0歳児クラスにおける乳児の泣き－保育士による観察記録を手がかりに－. 保育学研究43(2),65-72
- 奥山順子 (2008) 保育者の資質としての「遊び」理解－保育者の「語り」にみる保育観形成過程－. 秋田大学教育文化学部研究紀要 教育学部門. 63,13-23
- 大宮勇雄 (2006) 保育の質を高める ひとなる書房. 202-211
- 庄司順一・尾木まり・斉藤多江子・須永美紀・水枝谷奈央・柁澤早苗 (2010) 保育の質の評価に関する研究. 保育科学研究. 1,1-21
- 塩路晶子・佐々木晃・田村隆宏・佐々木宏子 (2004) 保育者の中の3つの「わたし」－子どもたちとの豊かな関係性を築くために－. 保育学研究 42(1),12-18
- 杉村伸一郎・桐山雅子 (1991) 子どもの特性に応じた保育指導－Personal ATI Theoryの実証的研究－. 教育心理学研究. 39,31-39
- 諏訪きぬ (2000) 保育者の保育観と「保育の質」 金田利子・諏訪きぬ・土方弘子編著 「保育の質」の探究 「保育者－子ども関係」を基軸として ミネルヴァ書房. 138-160
- 高濱裕子 (2000) 保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応. 発達心理学研究. 11(3), 200-211
- 高濱裕子 (1997) 保育者の保育経験のいかし方－指導の難しい幼児への対応－. 保育学研究. 35,304-313
- 高辻千恵 (2003) 乳幼児期の発達と保育の「質」. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 43,147-154
- 津守眞 (1997) 保育者の地平－私的体験から普遍に向けて－ミネルヴァ書房. 170